

## GTR 院生企画 “学生シリーズ講義 vol.1 / vol.2” 活動報告

報告者 川瀬 雅貴

## 【概説】

この院生企画では、GTR 学生が研究分野や研究内容の講義を行うものである。その目的は、参加者が異分野を知り、新しい視点や知識を得ることで、自身の研究をより活発かつ有意義なものとするところにある。

(補足) 本企画は、2020 年 2 月 (2019 年度) に開催予定であったが、COVID-19 流行により、2020 年 10 月 23 日と 11 月 20 日に延期されたものである。

企画名 学生シリーズ講義

vol. 1 ~いきものって おもしろい~

vol. 2 ~いきものって まだまだ おもしろい~

実施日 vol. 1 2020 年 10 月 23 日

vol. 2 2020 年 11 月 20 日

実施会場 vol. 1 名古屋大学 理学 C 館 化学第 3 講義室 / Zoom (オンライン)

vol. 2 Zoom (オンライン)

## プログラム

- |        |                   |   |
|--------|-------------------|---|
| vol. 1 | 15 : 00 - 15 : 10 | 開会  |
|        | 15 : 10 - 16 : 00 | 初回特別講演 小田 洋一 先生 (国際機構特任教授/理学 名誉教授)<br>「面白い」に巡り合う  |
|        | 16 : 10 - 16 : 40 | 川口 航平 (生命農学研究科 D2)<br>どんなトマトがお好み? 新しいトマトをゲノム編集で作る |
|        | 16 : 50 - 17 : 20 | 土田 仁美 (生命農学研究科 D1)<br>ラットを用いて哺乳類の繁殖制御メカニズムの解明を目指す |
|        | 17 : 30 - 18 : 00 | 松村 護 (理学研究科 (生命) D2)<br>病原体感染の予測・認識機構から考える植物免疫学   |
|        | 18 : 00 - 18 : 05 | 閉会  |

vol. 2 15 : 00 - 15 : 10 開会

【第一部】

15 : 10 - 15 : 50 生物学入門講座・生物なんでも Q & A

【第二部】

16 : 10 - 16 : 40 小寺 知輝 (創薬科学研究科 D1)

マーマセットを用いた創薬研究への貢献とその幹細胞技術

16 : 50 - 17 : 20 上田 彩果 (理学研究科 (化学) D1)

生物活性分子のケミカルバイオロジー

17 : 30 - 18 : 00 大橋 拓朗 (理学研究科 (生命) D2)

ショウジョウバエにおける聴覚神経回路の進化

18 : 00 - 18 : 05 閉会

企画者	木下 悟 (D2) 理学研究科 (生命)	植物生理学グループ
	正木 佑治 (D2) 創薬科学研究科	細胞薬効解析学分野
	川瀬 雅貴 (D1) 生命農学研究科	ゲノム・エピゲノムダイナミクス研究室

【本企画の背景/目的】

卓越大学院 GTR プログラムには、生物学と化学の別なく多種多様な研究を行う研究室/研究者が参加している。所属学生はこの広い学術分野をバックグラウンドにして、自身の研究分野と異分野を融合させることにより、研究の到達点を高めることが望まれている。しかしながら異分野を理解することは難しく、生物学と化学の間には基礎知識や研究哲学や目的、手技手法の違いから生まれる高い壁が存在している。そのうえ生物学を研究している学生同士でも、対象生物や研究対象の違いにより、互いの理解がなかなか進まない問題があった。

他にも GTR が開講するシリーズ講義やセミナーにより、所属学生が知識をインプットする機会が整えられていたが、学生自身が研究分野や研究内容をアウトプットする場は少なかった。アウトプットは自身の研究を整理し、知識を定着させる効能だけでなく、他者からのフィードバックを得られる好機でもある。故に、学生のインプットとアウトプットのバランスを整える場を作ることが、今後の研究の発展に必要なであると考えた。

さらに加えて本企画が動き出した 2019 年は GTR プログラムも動き出して間もない時期であり、学生間の交流は手探り状態であり、また 2020 年冬からは COVID-19 が流行し、交流機会自体が得られない状態が長く続いた。このような状態にあって学生主体で気楽に参加できる交流機会は需要があると慮った。

以上の点を解答として、学生が自身の研究分野や研究内容を講義し、参加者と交流する本企画を計画した。よって本企画は次の 3 点を目的にしている。

- ✓ 異分野の理解を促進し、その研究分野の面白さを体感する場を作る
- ✓ 学生主体のアウトプットの場を作る
- ✓ 研究者間の気楽な交流の場を作り、互いに研鑽の刺激としてもらう

そしてこの3つの目的は『より創造的で到達点の高い研究をおこなう』という大目標に集約される。加えて、企画の効果をより高め、持続化するために、シリーズ化を前提としたイベント形態とし、計画を立てている。

#### 【企画の内容】

本企画の中心は学生講師がおこなう講義である。vol. 1,2の二回は生物学を中心とした内容であったが、分野外の研究者（非生物系）や学部生にも伝わるような平易な言い回しや内容を心がけてもらった。また参加者の躓きを解消し、さらに交流を促進するため、講義内で複数回の質疑応答時間の確保し、そして自由討論が可能なイベント終了後のオンライン交流会も催した。学生講師にはプレゼンテーション技能の強化も兼ねたりハーサルを行ってもらい、講義の質の向上に努めてもらった。

vol.1 では初回特別講演として小田洋一先生（国際機構特任教授/理学 名誉教授）に『「面白い」に巡り合う』との題でお話をいただいた。さらに vol.2 では非生物学者、初学者向けの『生物学入門講座・生物なんでも Q & A』を行い生物学の基礎を学んでもらう機会を作った。

#### 【本企画の成果】

vol. 1/vol. 2 共に3名の学生講師（計6名）の講義を行った。参加者におこなったイベント後のアンケートでは高い満足度であった。各学生講師とも自身の研究対象の面白みを、時間が許す限り引き出すものであったと思われる。6名の学生の講義を行ったが、今後この企画を続けていくことにより、学生のアウトプットの場として、本企画は高い効果を発揮すると確信できる結果となった。

また参加した化学系の方々からのご意見は、生物学を中心として学ぶ報告者とは異なった視点をもっており、今後の改善点として活用することができるものだった。

そして、COVID-19の影響により vol. 1 ではオンサイト/オンライン併用型、vol. 2 ではオンライン型の開催になった。質疑応答やディスカッションはややオンサイト型の方が活発であったようだが、オンラインでの参加者もディスカッションへの積極的な参加がなされ、また場所に囚われない気楽な参加という利点もあったようで、オンラインを利用したイベントの可能性も示すことができた。

また各講義は学生がいつでも視聴できるようにアーカイブ化することができ、今後において異分野を理解する足がかりとしての役割を期待できる。

そして報告書を作成している時点で、新たに2人の学生が今後の企画へ参加を考えてくれており、次に繋げることができた企画であったと言えるだろう。